

ヨージェフ・クライナー 吉成直樹 小口雅史 編

『古代末期・日本の境界―城久遺跡群と石江遺跡群』

永田 一

法政大学国際日本学研究所が平成十九年度から二十一年度を実施した、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア）「異文化研究としての〈日本学〉」サブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」の研究成果は、『古代末期の境界世界―城久遺跡群と石江遺跡群を中心として―』研究成果報告書にまとめられた。本書はこれを母体とし、広く一般に向けて刊行されたものである。今回の刊行でより多くの人々が手にすることが可能となったことを、まずは喜びたい。

本書は、扱う時代を基本的に古代末期から中世初頭に限定し、「日本国」の北と南の境界世界を比較して、より豊かな日本史像を描き出すことを目的としている。その際、比較の対象としてあげられたのが、北は青森市の石江遺跡群、南は喜界町の城久遺跡群である。この二つの遺跡群は、「日本国」の周縁に位置するが、中央的な遺物が多数出土している」とされ、従来の南北の「境界」像を大きく変えるものとして、近年注目を浴びてきた。本書では、この両遺跡の重要性を改めて確認するとともに、境界領域の中で改めて位置づけ直して比較することで、「日本国」の北と南の境界世界の共通性と異質性を明らかにしている。

次に本書の構成について紹介したい。まず総論として、本書全体に関

わる境界論について述べた村井章介氏の論文が配されている。Ⅰ「南の境界―喜界島・城久遺跡群」は七本の論文と二本の補論で構成されている。Ⅱ「北の境界―青森市・石江遺跡群」は五本の論文と石江遺跡群についての四つのコメントで構成されている。Ⅲ「討論―南北の境界の比較」には、「南北の境界領域の比較―討論のまとめ―」と題し、二〇〇九年十一月十四日、十五日に法政大学にて行われた総括シンポジウム「古代末期の境界世界―石江遺跡群と城久遺跡群を中心に―」の討論の内容を、南に関係するものについては吉成直樹氏が、北に関係するものについては小口雅史氏が、要約・整理したものが収録されている。「城久遺跡群は官衙か?」「石江遺跡群は官衙か?」「ヤコウガイ交易の「二つの口」」などの重要な争点を含む一六のテーマに分けてまとめられている。

論考が多数に及ぶため詳細な紹介はできないが、各論考の内容を評者なりにまとめて紹介し、それから本書全体についての考えを述べさせていたきたい。

本書冒頭の村井章介「古代末期の北と南」は、石江遺跡群と城久遺跡群の発見が、自身が提唱した日本列島の「地域空間」モデルに突きつけ

た問題として、同心円モデルにおける中心から異域への単純なグラデーションがそのままでは成り立たなくなつたことを述べている。そして両遺跡群は性格こそ違うが、内との強いつながりが想定される、境界空間に浮かぶ「島」のような場であり、「移植された中央」と呼んでもよいかも知れないとする。また、律令制支配との関わりの有無・程度という視点のみで両遺跡群を評価する視野の狭さを克服していく必要があると指摘する。

I 「南の境界―喜界島・城久遺跡群」では、まず吉成直樹「古代・中世期の南方世界―キカイガシマ・交易・国家―」が、琉球弧における古代・中世並行期の歴史展開を描くにあつた論点と問題点の整理を行う。「日本」の内外の境界領域に位置づけられる奄美群島（とくに奄美大島、喜界島、徳之島）がヤコウガイをはじめとする南方物産の交易拠点の前線で、その前線が一二世紀頃に短期間に南下することで琉球弧のグスク時代が幕を開けたというシナリオを書くことができるが、なお検討すべき課題もあると指摘する。そして、東シナ海を中心とする地域の動きの中に位置づけて、はじめて古代・中世並行期の琉球弧の理解が可能となり、その一連の過程の初発の段階に位置づけられるのが、喜界島が果たした大きな役割だとする。

澄田直敏「喜界島城久遺跡群の発掘調査」は、発掘担当者自身により、平成十四年度から平成二十一年度までの八年間に及ぶ城久遺跡群の発掘調査の成果が説明されたものである。城久遺跡群の歴史的位置づけについて、本土色が極めて濃い古代の遺物組成、国家的施設に偏在することが多い越州窯系青磁の多量の出土から、『日本紀略』にみえる、大宰府

が下知した「貴駕島」と現喜界島が関係すると考えられること、中世に入ると、宋・高麗を含む環東シナ海域における交易活動の中で城久遺跡群が果たした役割は小さいものではなく、南島経営の拠点機能を果たしていたと考えられることを指摘する。

新里貴之「南西諸島の様相からみた喜界島」は、城久遺跡群について、南西諸島の文化と比較し異質な部分と共通する部分を、在地の煮沸土器を主眼におき、遺物組成から検討する。極めて多量の貿易陶磁器と土師器の存在より、九州本土の土師器文化圏の南端に位置する特殊な遺跡とみられるのは確かだが、南西諸島の観点からみると、供膳具を製作しない、組成は甕が主体、製粉器が主要の石器組成は前段階の兼久式段階とほとんど変化しない、九州本土地域の中世墓の葬墓制と異なるなど、生活様式には南島の要素が認められる。つまり、城久遺跡群は、異文化間の境界領域に位置し、遺物の質・組成の検討からは南島と日本の狭間的な様相を示す遺跡であると指摘する。

高梨修「列島南縁における境界領域の様相―古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果―」は、一九九〇年代以降、「ヤコウガイ大量出土遺跡」「カムイヤキ古窯跡群」「城久遺跡群」を対象に、奄美諸島で重ねられた考古学・文献史学の相互研究の結果、双方の研究情報の共有化が著しく進み、古代・中世の琉球弧について総合的理解が図られるようになった研究動向を詳述し、「境界領域」として機能していた奄美諸島の新たな歴史像が確認されはじめたことを述べる。そうした新たな歴史的理解は、琉球弧における国家形成過程に対しても、従来の沖縄本島を中心とする段階発展的な枠組みに少なからず影響を及ぼすものであり、琉

球弧の考古学研究は「北からの衝撃」を徹底的に検討しなければならぬ事態に直面していると指摘する。また、シンボジウム「古代末期の境界世界―石江遺跡群と城久遺跡群を中心として―」の場において安里進氏から提起された四つの質問に対する反論も述べられている。

中島恒次郎「城久遺跡群の日本古代中世における社会的位置―津軽石江遺跡群との相違を含めて―」は、遺物・遺構両面から描ける城久遺跡群の性格について論及し、南と北の境界領域で何が起きていたかを考えるため城久遺跡群と石江遺跡群の対比を行う。その際「中心」的制度との関係性を探るため、古代における階層表現装置として考えられる供膳具の「原型―模倣型」の概念を主に用いて検討する。日本本土に所在する「中心」の領域内にある石江遺跡群と、全く異なる「異界」の領域にある「移植された中心」的な存在としての城久遺跡群という姿に分けられること、古代後期に城久遺跡群に入った「中心」を背負う人々は、喜界島の人々にとつてさして「刺激」にならない存在だったこと、城久遺跡群が喜界島の人々に与えた影響の程度について、島内の相対化により検討を深める必要があることを指摘する。

安里進「ヤコウガイ交易二つの口と一つの口―争点の整理と検討―」は、沖縄の貝塚時代後期の社会像について自説の論考過程を整理し、高梨修氏の一連の研究に対する問いかけと反論が述べられている。論題にある争点とは、ヤコウガイ交易の窓口として〈奄美大島北部―大和〉と〈久米島―隋・唐〉の二つを認める（安里氏）か、前者のみを認める（高梨氏）かである。そして、この争点の根底には①「ヤコウガイ大量出土遺跡」の概念規定をめぐる両氏の見解の相違②久米島の大原ヤコウ

ガイ加工場遺跡について、重要な根拠と成り得るか否か。一九七二年に安里氏が遺跡を発見したが、発掘調査が行われないうまま、一九九九年の再訪時には開発で遺跡中心部分は失われてしまっていたという。発見時並びに再訪時の情報や、採集した遺物などから奄美諸島のヤコウガイ大量出土遺跡より大規模で加工場としての性格が明確であると、重要な根拠として論を展開する安里氏に対し、高梨氏は発掘調査が行われていない遺跡を重要な根拠とすることに疑問を投げかけている、という二つの意見の対立があることが述べられている。

中本謙「琉球方言ハ行子音p音の素性をさぐる」は、日本語史におけるハ行子音の変遷で文献以前はp音であったとする説の根拠とされてきた琉球方言ハ行子音p音について、実は新しいものもあるのではないかという観点から、宮古、八重山方言を中心に考察したものである。琉球方言のワ行子音w音は狭母音化によって呼気が強まったことで、w v r の変化を起こしたと考える。そして狭母音化と強い呼気を考えるなら、南琉球方言のハ行子音p音の中にはw v r の変化を遂げているものもあるという可能性も否定できないとする。

間宮厚司「日本の中の諸言語―アイヌ・ヤマト・琉球の言語生成―」（補論1）は、アイヌ語は一九世紀まで記録が無いため詳細は不明だが、縄文時代に日本列島で話されていた言語はアイヌ語の祖先以外に有力な候補が無く、その後、日本語（いわゆる大和言葉）が大陸から朝鮮半島を経て弥生文化とともに北九州に入り、日本列島全域に広まるにつれ、アイヌ語は南から北へ移動させられたと推測されているとする。琉球語は日本語の一方言であることが言語学的に証明されていることを説明し、

①沖繩の言葉は言語史的に二、三世紀から一五世紀頃まで空白時代が存在する②琉球列島の言語差が激しい理由③アイヌ語と琉球語の地名の関連性、についての研究を紹介する。

福寛美『『おもろさうし』の甕』（補論②）は、『おもろさうし』の甕の全二五例を検討したものである。まず甕の用例は久米島おもろに多く見られること、多くの甕は祭祀の場で供され、その祭祀が天上他界を志向している用例も確認できることを指摘する。また、おもろで語われている人物が拠点とした場所から中国産の輸入貿易陶磁器やタイ産の器物が出土することなどから、甕の例には、中国、朝鮮半島、東南アジア産のものが含まれている可能性もあるが、百甕や八十甕のような「数多く」という比喩表現が使われていたり、庭や社などの祭祀で甕が惜しげ無く地面に据えられていたと考えられることから、『おもろさうし』の甕の多くが南西諸島の権力者達にとって身近なカムイヤキだったとする。

II 「北の境界―青森市・石江遺跡群」では、まず小口雅史「古代末期の北方世界―北方史グループの研究視角―」が、北方史グループが城久遺跡群と対比すべきものとして新田（1）遺跡を中心とする石江遺跡群を選んだ理由を説明する。そして北日本の歴史展開において、交易と交流が在地のさまざまなレベルでの軋轢を生み、それによって発生した「防御性集落」などが古代末期の北奥の特徴であることを述べ、こうした状況の中で新田（1）遺跡を中心とする石江遺跡群をいかに位置づけるかを論じる。新田（1）遺跡からは檜扇・物忌札・斎串・形代・仏像・付札風木簡などの大量の木製品が出土し、これまでは「日本国」との密接な関係を示すものとして評価されてきたが、そもそもこれらの

木製品の年代観がはっきりしない点があるなどの問題を指摘し、檜扇・斎串・木簡などの素材が在地産であることや中央の律令的祭祀と異なり人形が未発見なことなどから、むしろ在地性の強さに留意すべきではないかと指摘する。

木村淳一「青森市石江遺跡群の特質」は、発掘担当者自身により石江遺跡群の青森市教育委員会の発掘担当部分について、発掘調査の成果を各遺跡ごとに説明し、さらに石江遺跡群内での古代から中世初頭の様相を三期に分けて概観し、特質を論じる。周辺に前段階の集落があり、その変遷の後に成立した集落として新田（1）（2）遺跡が存在しており、集落の構成は津軽平野を含めた青森平野内の集落と変わりない施設だとする。また、北方的な要素に擦文土器があるが、直接の搬入は認められないとする。さらに南（国家）側の要素に、緑釉陶器、八稜鏡、石帯、檜扇、木簡、神像、（仏）像手、木製祭祀具、（鉄製）鏡、墨書土器、土馬などがあるが、直接的流入は鏡や緑釉のごく一部で、残りの資料のほとんどは擦文土器同様に在地で生産され変容していると指摘する。

葛城和穂「青森市新田（2）遺跡（県教委担当）」（コメント1）は、発掘担当者自身により青森県教育委員会が発掘を担当した新田（2）遺跡の北半分の約五〇〇〇㎡について、調査成果をまとめたものである。新田（2）遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡だが、平安時代には溝跡で区画された大規模な集落が存在したことが明らかとなり、出土遺物は多岐にわたるが、中でも擦文土器や石帯、木製祭祀具などはこの遺跡の性格を考える上で重要な遺物であるとしている。

渡辺晃宏「新田（1）遺跡出土木簡の意義」（コメント2）は、新田

(1) 遺跡出土木簡と律令制下の木簡を比較検討し、どの程度律令制の影響を捉え得るかを論じている。墨書内容からは律令制支配に関わる内容は全くみられないと指摘する。また形態的には律令制支配に関わる木簡に類似した形態のものも含まれるが、両端の左右に切り込みをもつ形状は律令支配に関わるものだけに限定されないことを指摘している。さらに、律令制支配に関わる木簡にはない特異な形状の木簡が含まれていることも指摘する。そして、新田(1)遺跡出土木簡をストレートに律令制要素に結びつけて理解するのは適当ではないとする。

須藤弘敏「新田(1)遺跡出土の仏教関係遺物について」(コメント3)は、現在までに確認された青森県の仏教関係遺物としては、新田(1)遺跡出土の遺物は最も古いとされることから、須藤氏自身が確認し得たもので、明らかに宗教関係器物と考えられる九点について検討している。鉄鏡以外の八点の遺物を神像や仏教関係のものとして推定するが、いずれも中央の本格的な造形とは形状も技術も異なり、材質も含めて明らかに地方で制作されたとは考えられず、青森で制作されたものであると指摘する。また、この遺物群全体から教義や教団の特徴も言うことができず、神像らしき像の混在からすれば教団仏教を背景とする可能性はさらに乏しいとする。

山田祐子「秋田県の古代木製祭祀具―能代市樋口遺跡を中心として―」(コメント4)は、まず秋田県米代川下流域左岸に位置する祭祀遺跡である能代市の樋口遺跡と、北秋田市の地藏岱遺跡出土の木製祭祀具を検討し、新田(1)(2)遺跡との比較を行う。新田(1)(2)遺跡で出土した馬形の形状や、上端を左上から右下に、下端を右上から左下

へ切り落とした形状の齋串について秋田県内の事例と比較検討し、新田(1)(2)遺跡の木製祭祀具は律令祭祀の系譜に連なるが、樋口・地藏岱遺跡とは別の取捨選択を経ていると指摘する。

宇部則保「九・一〇世紀における青森県周辺の地域性」は、青森県の地域性を明らかにし、律令社会と擦文社会の間にある境界領域の独自性について論じる。集落形成より、太平洋側の八戸・上北、日本海側の津軽南部・津軽北部の四つに区分し、南を伝統集落域、北を新興集落域とし、南から北へ集落域が拡大したと指摘する。土師器のロクロ技術の普及、須恵器の受容などの検討より、九世紀後半以降の東西差、特に津軽北部地域と八戸地域の差異は、伝統集落の形成に連動する、在地集団の統合状況によるのであり、統合が希薄な津軽北部地域は律令側からの人・物・技術の受容の際にさほど軋轢が無かったが、八戸地域は統合が進んでいたため九世紀後半以後の新興集落も在地の束縛を多く受けており、律令側は従前からの集落構造を温存させた中で影響力を行使する方が有益だったと指摘する。

八木光則「古代末期の北奥蝦夷社会」は、囲郭集落、北奥祭儀、北方交易をキーワードとし、古代の北奥全体について論じている。北方交易による人間の往来が引き起こす負の影響から集落内の弱い立場の人間を保護する必要が生じ、さらに地域の衰退に対する危機意識が集落構成員の結束を高め、対外的に主権主張を行うため囲郭集落が発展したとする。また北方交易による人間の往来は律令祭祀以後の祭祀形態や古密教を伝えたが、それらは律令祭祀を知る地域の人たちとの交流の道具となる一方、北奥独自のアレンジが加えられ、自らの集団の共同体祭儀として確

立していったとする。そして、北奥の蝦夷社会では古代末期に独自の境界世界が展開されていたと指摘する。

小嶋芳孝「渤海から見た北東北のシャーマニズムと仏教」は、北東北を中心に出土する錫杖状鉄製品と筒型鉄製品、そして石江遺跡群から出土した律令祭祀に起源を持つ木製祭具などの宗教関係遺物についてどのように理解するか、また日本の王権世界と北海道の蝦夷世界の中間に広がる境界領域に位置する石江遺跡群をいかに評価すべきかを、渤海と比較して論じる。シャーマニズムを基層文化とする点で蝦夷と渤海は同じだが、国家を形成した渤海は仏教寺院が境界祭祀の役割を果たし、蝦夷社会ではシャーマニズムに日本海側では日本の木製祭具が加わり、太平洋側ではシャーマニズムに特化した祭祀が行われていたと指摘する。そして石江遺跡群などで境界祭祀を行っていたとすると、一〇世紀代には蝦夷境界領域に暮らす人々の間に地域観念が形成されていたことになるとする。

さて、本書全体を通読して考えたことを述べていきたい。まず注目すべきはⅠ部とⅡ部が対応する構成になっていることである。本書の研究視点について、石江遺跡群と城久遺跡群だけを直接比較するのではなく、まず両遺跡群を、南北の境界世界の中に位置づけて総体的に理解した上で比較するという新しい視点で取り組んだことが、本書の「はじめに」で述べられている。そうした姿勢の背景には、従来の両遺跡群に対する評価である「中央的」や「中央との強いつながり」が、はたしてどの程度認められるのか、遺跡そのものの評価という基本に立ち返り、改めてそこから議論をスタートさせようという意図が感じられ、説得力がある。

では、そうした構成の中で、論考の扱うテーマまで全て対応関係にあるのかと言えばそうでは無い。これは、城久遺跡群では「日本国」との政治的なつながりをうかがわせる遺物が多く認められるのに対し、石江遺跡群は北奥独自のアレレンジが加わった呪術や宗教に関係する遺物が目立つという、異なる特徴がみられることに起因する。しかしⅡ部において石江遺跡群出土の木製祭具をとりあげて祭祀や信仰について言及した部分が多かったことからすると、祭祀や信仰に直接対応するものではないが、Ⅰ部において城久遺跡群における葬墓制の問題もとりあげてみても良かったのではないかと思う。またこうした構成の中、両遺跡を境界領域の中で位置づけながら積極的に比較検討した中島恒次郎氏の研究が目目される。本書の研究視点を生かしながら、南と北の両方の境界領域に踏み込んだ議論を展開している。

また、本書全体において、村井章介氏が述べた「移植された中央」という言葉が、大きく作用していることも重要である。村井氏は本書の論考において石江遺跡群と城久遺跡群をどちらも「移植された中央」と呼べるとしている。これについて、Ⅲ部所収の「南と北の比較」における八木光則氏の、北方はグラデーショナルな変化の中で捉えられるのではないかとする見解とは異なっている。また、中島恒次郎氏は本書の論考で、日本本土に所在する「中心」の領域内にある石江遺跡群と、全く異なる「異界」の領域にある「移植された中心」的な存在としての城久遺跡群という姿に分けられると指摘しており、八木氏の見解に近いと思われる。このように村井氏が提示した「移植された中央」という言葉は、境界領域の遺跡を検討するうえで今後重要なキーワードとなると思われ

るが、それを安易に遺跡に当てはめて考えることは慎むべきであろう。

この言葉の意味に対して各自が考えを深めながら、遺跡の検討を慎重に行った後、細心の注意を払って用いるべきである。

I 部所収の論考に明らかなように、城久遺跡群は遺物組成から確かに「日本国」との強いつながりが想定される。しかし、それは「一つの拠点」の性格なのであり、南の境界領域全般の性格ではない。本書でも指摘するように城久遺跡群に居住する人々が周囲に与えた影響について検討する必要がある。また澄田直敏氏は、喜界島内で城久遺跡群に先行する時期の遺跡との比較の重要性を指摘しているが、城久遺跡群の本質を見極めるため、喜界島の城久遺跡群成立前史の考察も重要な課題である。

II 部所収の論考は、石江遺跡群出土の木製祭祀具などを検討した結果、律令的世界との交流の道具として取り入れ、北奥独自のアレンジを加えており、その在地性の強さに留意すべきとする。在地性を色濃く持つ（交易や祭祀などの）拠点が成立した背景とは何か。これは北奥という地域の性格を改めて問い直すことにつながると思われる。

また、本書の「おわりに」で小口雅史氏は、事前の研究計画段階では南と北の共通性が前面に浮かび上がることを想定していたが、研究が進むにつれ南と北の境界領域の異質性が際立つようになり、むしろこちらこそ強調すべきなのかもしれないと今は考えていると述べている。この異質性こそが本書の最も重要な結論であり、境界領域研究の新たな展開につながっていくと思われる。

本書に収録されている論考を紹介し、評者なりに考えたことを述べさせていただいた。評者の力量の不足により論旨を読み誤ったり、的外れ

な指摘をしている恐れもあるが、ご寛恕いただければ幸いです。

(A5判、四一六頁、二〇一〇年五月、森話社、価格七二〇円十税)

(ながた・はじめ 法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程)